



10月の進路関係行事

- 1 (木) 第3回定期試験 [~6 (火)]
- 6 (火) 生徒集会 (認証式)
- 7 (水) 芸術鑑賞会
- 8 (木) 第2回授業観察 [~12 / 8 (火)]
- 9 (金) 英語暗誦弁論大会①
スタサポ結果報告会②
- 10 (土) 駿台模試①②
進研記述模試③
- 12 (月) ● 体育の日
- 13 (火) 公開授業 [~16 (金)]
- 14 (水) 月曜日授業
生徒会会計中間監査
- 16 (金) 進路希望調査①②
進路講演会③
- 17 (土) 小論文課外③
- 18 (日) 大学別模試③
- 20 (火) 放課後課外なし
献血
- 22 (木) 放課後課外なし
- 23 (金) サイエンスフォーラム①
- 24 (土) 全統記述模試③
県高校新人大会
[~25 (日)]
- 26 (月) 学校創立記念日
- 27 (火) 生徒懇談期間①②
[~11 / 13 (金)]
- 29 (木) 月曜日 40分授業
大掃除・ワックス (特別教室)
- 30 (金) 親からのメッセージ①
職業人講話②
- 31 (土) 進研模試①
進研模試② [~11 / 1 (日)]
大学別模試・進研駿台共催マーク模試③
[~11 / 1 (日)]

※○数字は学年を示します

▼ 濱中裕明先生の講義風景



＜「秋」に想う…＞

夏休みが明けて1ヶ月が経とうとしています。

例年よりも暑さの和らぐ時期が早いのか、最近は冬服で登校する生徒も目にするようになりました。いつの間にか夕暮れ時も早く、どことなく寂寥感のある空気が身の周りを包むようになりました。暑がりの私も車のエアコンを切って、車窓から入り込む風を楽しみながら出勤する日が続いています。

さて、季節はいよいよ秋を迎えたわけですが、皆さんはこの「秋」という文字に「あき」以外の別の訓読みがあるのを知っているでしょうか。(ちょうど9月初旬に行われた大学入試センター試験説明会の折、3年生にはそのような話をさせてもらいましたが…)「秋(あき)」は「穀物が実る大切なとき」という、この季節に象徴的な意味合いから「とき」とも読むのです。

この秋…、1年生にとっては、真新しい制服に身を包んで入学してから半年が過ぎ、高校生らしくなってきた「成長の秋(とき)」だと言えるでしょう。2年生は、部活動で中枢を担う立場になり、新人大会や芸術文化祭に向けて頑張っている一方、11月の模擬試験から理科と地歴公民が加わることもあり、遠くに“大学受験”というものが見え始める時期といえるかも知れません。

「輝く秋(とき)」になってほしいと願います。そして3年生…、あなたたちが培ってきた中身を発揮するのは今からです。高校卒業後の進路に向けて、今こそ「勝負の秋(とき)」と手綱を引き締めてくれることを祈ります。

いよいよ平成27年度も後半に入ろうとしています。この秋は半年先を占う貴重な時間なのかも知れません。地に足をつけて、腰を据えてみましょう。

＜サイエンスフォーラム「砂山の幾何学」＞

9月12日(土)は兵庫教育大学大学院教授の濱中裕明先生をお招きして、1年5組を対象にサイエンスフォーラムを開きました。濱中先生は10年の長きにわたって、この講義を担当していただきました。このことを踏まえて講義の終了時には、本校から感謝状を贈呈いたしました。

「砂山の幾何学」と題された当日の講義において、三角形や四角形の枠に向けて、一点から落とした砂のつくり出した稜線が、数学で学ぶ三角錐や四角錐などの理論と一致した場面では、おそらく聴講した生徒も目を見張ったのではないのでしょうか。

濱中先生は、大学で教員志望の学生に対して講義をされる機会もあるとのこと、「数学教育」という観点からも興味深い講義だったと感じます。サイエンスフォーラムをはじめとする、各界の著名人をお招きする行事では、今年度も多彩な講師陣が来校され、皆さんを魅了することでしょう。

<「やばい」=素晴らしい?…変わっていく言葉の意味の中で…>

9月18日(金)付の山梨日日新聞に文化庁が実施した平成26(2014)年度「国語に関する世論調査」に関する記事が載っていました。「国語に関する世論調査」については、第4号(7月24日発行)で「本が教えてくれること」という文の中でも紹介しましたが、今年も興味深いデータが得られたようです。

同新聞記事によると、「本来は不都合であることや危険であることを意味する『やばい』を、『とても素晴らしい』などと良い意味で言うことがある」人が10代で91.5%、20代で79.1%に上ることが示されていました。年代が上がるにつれて良い意味で言う割合は減るものの、全体では増加傾向にあり、国語辞典も「やばい」について良い意味を掲載するものも多くなっているのだそうです。

10年以上前、3年の担任をしていたときのこと…、クラスのある生徒が大学のオープンキャンパスに参加しました。感想を聞くと、その生徒は手を横に振りながら「先生、あの大学ヤバい」の回答。気に入らなかったのだと判断した私は「そっか」と言って、その会話が終わったのですが、暫くするとその生徒は「先生、あの大学を受けたいんですけど…」。「?」「オープンキャンパスに行ってヤバ過ぎて」…。そのとき初めて、この生徒が肯定的な意味で「やばい」と発していたことを知りました。

これを即、日本語の乱れ…と決めつけるのは早計でしょう。例えば「やばい」の持つ「危険」という元の意味が「危険なくらいに心が引かれる」と転化したと考えると、意味の逆転は不思議なことではありません。我々は古典で「をかし」や「あはれ」などの意味を勉強して、言葉の意味が時代とともに変化することを知っているはずです。そのこと自体は決して大きな問題ではありません。

ただ懸念するのは、言葉の意味が複雑化しているにも拘わらず、発する言葉が貧困化している点です。上記の調査では「いいか悪いかの判断がつかない時に『微妙』と言う」のは10～30代で90%超となり、「面倒くさいことや不快感を表す際に『うざい』という」のも増加傾向にあることが紹介されています。「言葉」が、自分や周囲の人々を簡単に左右する存在感を持つツールであるからこそ、ちゃんと使いたいと思いますし、ちゃんと聴きたいと改めて感じたところです。

<南高生に読んでもらいたい一冊>



この本を開くと「東京メトロ東西線で日本橋に行くと、空色のラインが一本引かれた駅名『日本橋』の看板に、ローマ字で『Nihombashi』とあるのが目に入った。何かの間違いいではないかと思って…」という文章で始まります。この疑問についての回答は本文に任せるとして、今回紹介する一冊は山口誠司著『ん 日本語最後の謎に挑む』(新潮新書、2010)です。

漢語や漢文を和語で示していた『古事記』や『日本書紀』、『万葉集』などの上代の文献には「ん」を示す文字が一つもありません。語(音)としてかつての日本列島には存在しなかったとされる「ん」…これは一体、何なのでしょう。考えてみると「ん」は実に謎の多い語(音)です。母音でも子音でもなく、清音でも濁音でもありません。また単語としての意味を持ちません。語頭に表れることもないので、“しりとり”では「ん」で終わる言葉をいうと負けになります。

本書では、「ん」がいつ誕生し、“どんな影響を日本語に与えてきたのか?”を空海、明覚、本居宣長、幸田露伴など碩学の研究と日本語の歴史から考えていきます。

読み進めていくと「ん～」と考え込んでしまう場面もあったわけですが、普段、我々が何気なく喉に溜めて出す、この「ん～」が、実は不思議な語(音)であることを、この本を読みながら初めて知りました。何気ない疑問が学問の扉を叩く…誰かにとって、そんなきっかけの一冊になれば…と思います。